

# 巻 頭 言

武 田 信 子

2010年2月にオランダの教師教育学者コルトハーヘン氏の「Linking Practice and Theory : The Pedagogy of Realistic Teacher Education」を翻訳出版した（「教師教育学」(学文社)）。この本においては、教師教育者と呼ばれる人は、現場経験を持つ大学教員、現場指導をする学校教員を意味しており、そのどちらも理論と実践の双方を学んでいる。理論だけの大学教員や実践だけの学校教員は「教師教育者」として適切であるとは考えられない。大学の授業自体が現場実践と考えられているから、学び、を促進するようなワークショップ形式の授業が提案されている。一方通行の教える授業、眠くなる講義はもはや古いタイプの先生のものである。学生は、知識や情報に関しては、パソコンを始めとしたあらゆる学習機能を備えたラーニング・コモンズで自分で学べるから、教師と学生の集まる場としての授業は、従来の与える、教えるものではなく、考え、議論し、体験するものと考えられているのである。

さて、初めて大学の教壇に立った時、私は足が震えた。塾で教えた体験はあったけれど、それでは足りないと思った。これから学校の先生になろうとする学生たちに一体自分は何が教えられるのだろうと、自問自答する日々が始まった。教育心理学の授業で理論を述べるたびに、それはすべて自分に還ってきて、今この瞬間に自分がこの理論を実践に使いこなせているのだろうかかと恥ずかしくなった。動機づけの授業をしているのに、寝ている学生がいるのではお話にならない。短期記憶で対応できるテスト問題を作成しては、「見えない学力」について語れない。初心の頃は、自分が「教育心理学」を体現できる教師にならなければ、学生には「教育心理学」を教えられないと思うと、一つ一つの言葉を発するたびに申し訳ないという思いにさいなまれるのだった。でも、誰が「教育心理学」実践を教えてくれるというのだろうか？誰が「教師教育」を実践してくれたらう？

日本において、教職課程の「教職に関する科目」や「教科に関する科目」を教える大学教員の多くは「教師教育者」になるためのトレーニングを受

けていない。「教師教育者」になるのに教員免許がいるわけではないから、教育実習をしたこともなく、研究授業も公開授業もなく、授業観察をされて自分の授業を批評されたりすることもなく学生を教えている。口下手であろうが、人見知りであろうが、「教育学」は教えられるし、ひいては「教師教育」もできる、とみなされている。これはつまり、料理学校の先生が、食材や栄養の知識を披露し、レシピの解説をし、食文化を講じているけれど、自分自身でその場で調理したり、客に食べてもらったりしたことがない、と言うのと同じことではないか？それでは料理学校の先生はつとまらない。が、大学ではそれを問われることはない。

一方で、近年は、実践重視の傾向が高まり、文部科学省も実践家を大学に入れることを推奨しているから、学校現場出身の実践家とされる大学教員が登場してきているが、彼らもまた「大学の教師教育者」になるためのトレーニングを受けてはいない。大学生の発達段階を学ぶことなく大学生を教え、これから学校現場に立つ若者に、パソコンのない時代の学校教育で有効だった教え方を教える。

もちろん、私は、ぶつぶつと古いノートを見ながら独り言をつぶやいていたまさに研究者、という大学の先生の授業がそれなりに良いと思うし、自分の専門分野について楽しげに滔々と語る先生も嫌いではない。

しかし、話は「教師教育」である。教育について最も深く考えているべき人たちである。「教師教育者」はトレーニングを積み、学生とともに「教育」とは何かについて悩み、問いかけ、自分の実践について、あるいは研究的態度について振り返り、批評され、成長していく必要があると思う。

大学の教師教育者が自らを題材として教師教育を考えることはこれまでにほとんどなされていないのではないだろうか？そして、これからはなされる必要があるのではないだろうか？「教師教育学」はそれを考えさせてくれる本として、読まれていくといいと思っている。